

北海道合鴨水稲会

水かき通信

北海道合鴨フォーラムを終えて

世話人代表 浅野晃彦

暖冬の子報に反し、年明けには厳しい冷え込みが続いた今冬も終わりを告げようとしているこの頃、農繁期を控え、皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

さて、2月1日に行われた、全道合鴨フォーラム及び、総会においては、詳細は別頁のレポートをお読み頂きたいと思いますが、遠いところ多くの方に参加して頂き、改めて御礼申し上げます。今回のフォーラムは、一般参加も含め、アイガモ農法をキーワードに様々な立場から農業に対する想いを確認し合い、改めて、農業の持つ食、教育、環境等に対する多面的な機能が浮き彫りにされ、多くの方の共感を得た事と思います。

また、少し前までは、多くの会員の方が地域において半ば変人扱いされていた事と思いますが、これも、改めて自分達のやってきた事に自信を持ち、共感の輪が広がった事について有意義な集まりであったと思います。

もとより、農業を単なる食糧生産だけでなく地域文化の保持と継承、環境の保全、そして都市との交流などから、各自の哲学を確立してきた多くの会員の方の實踐が、このフォーラムを機会に更に多くの異なる立場の人々との輪が広がる事を願っています。

農業情勢が混迷を極める中、様々な価値観があふれていますが、北海道合鴨水稲会はこの輪の中心にある農業が我々を含めた多くの人たちの癒しの場となるよう努力していきたいと思っています。



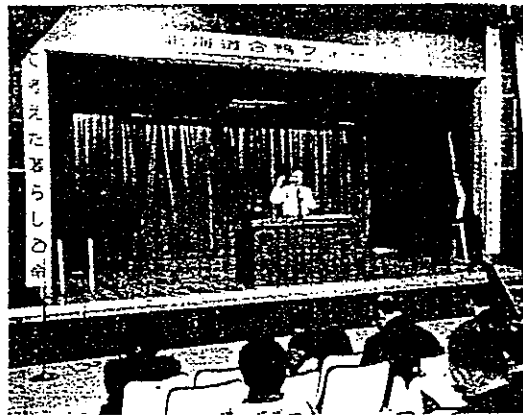
2年後の西暦2000年には、全国大会の北海道開催も総会で検討されました。実現の際は会の基本理念を確認し、素晴らしい大会となるよう、少々気が早いですが、会員の皆様の御協力をよろしく願います。

最後に、農繁期を目前にし、皆様には忙しい中どうかケガの無いよう、作業には留意され、夏の視察会に再びお目にかかれる事を楽しみにしています。

北海道合鴨フォーラム及び第4回総会報告

事務局 宮入 隆

昨年までは総会と同時に、主に会員や関係者を対象とした研修会を開催していたのですが、今年は広く一般の方々にも参加してもらえる会にしようということで、「北海道合鴨フォーラム」を総会と共に2月1日に開催しました。フォーラムのテーマは、合鴨を農業又は農村と都市を結ぶ架け橋と考えて、「合鴨で考えた暮らしと命」としました。場所は旭川市勤労福祉センターで、参加者は会員、関係者、一般参加者を含め約70名と、初回としては上々の参加人数になりました。

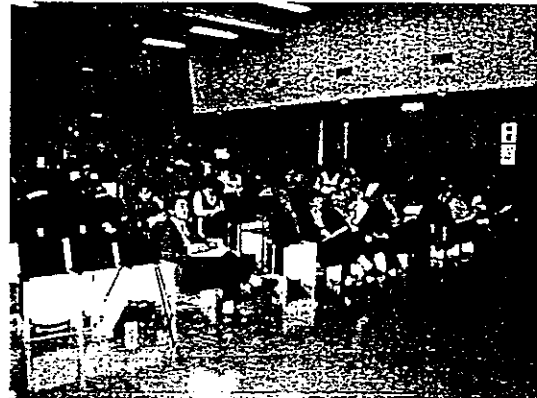


基調講演は上川農業試験場の相馬場長に、「農業が支える暮らしと命」という演題で行って頂きました。

まず、相馬場長は大きく世界全体の環境汚染の問題を取り上げ、日本人が（生活者として）生きているだけでも環境を破壊しており、アメリカの地下水を汲み上げる灌漑農業の例などを上げながら、農業生産も環境破壊をして行われていることを話されました。また、土壌の許容量を超えた施肥量の増加の問題や、硝酸態窒素の増加によりもたらされる地下水汚染の話もされ、「加害者としての農業という状況が続いたら、これから自然が私たちに反逆してくるであろう」と、現在の農業生産の問題点を指摘されました。

続いて食の問題については、「昭和34

年以降に生まれた人の平均寿命は41歳になる」という説についての話から始まりました。昭和34年というのはインスタントラーメンが発売された年であり、相馬場長はそこを食の外部化のスタートラインであるとして、加工食品の増加によって、食品添加物という異物を大量に体内に取り入れ、体の抵抗力（生命力）が低下し、「生命の危機」が訪れていることを指摘されました。ここでアトピーの増加やO-157の問題を取り上げた後、生産者に対して、「現在の農業がおなかを満たすだけの農産物ではなく、「農業の原則」を守って、日々の健康を維持・向上させ、子孫の遺伝子の安全性を保障するような農産物を作り、本当に誇れるような生命産業となっているのか。」という問題提起をしました。さらに消費者に対しては、輸入農産物は本当に安いのか、また距離的にも、貯蔵するにしても、どうしてもポストハーベストが必要となるとして、「残留農薬等の輸入農産物のリスクを承知して、賢い選択をして欲しい」と話されました。



そして残留農薬に関連して、日本の食品残留農薬基準が国際基準に合わせて緩和されようとしているなかで、「農業生産サイドが消費者サイドにその危険性をきちんと訴えてきたのか、行政サイドばかりに目が

向いていなかったか」と疑問を投げかけて、「消費者（国民）と対話し、連携していかなければ、21世紀の農業に出口はなく、食の安全性こそが国民と連携する手段である」と、生産者と消費者との交流の重要性が増すことを訴えられました。

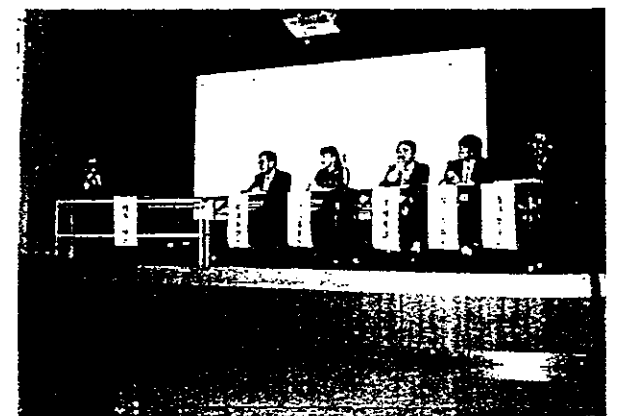
食の安全性のもう一つの側面として、ホウレンソウを例にして話されたのは、「野菜の栄養価が低下」しており、さらに「硝酸態窒素が増加」することで、「健康に良いと思って食べていた野菜が実は危険である」という問題です。この原因として、生産者が以前より怠け者となり、化学肥料に頼りすぎてきたことや、工業製品の季節外れの野菜生産を指摘なさっていました。



次に相馬場長が話されたのは「人と環境に優しい生産技術」についてです。「環境許容内の施肥技術」として、作物が吸収する以上の肥料をまかないために、土壌診断技術等を農家自身の判断で積極的に使い、また、もう一度原点に戻って、作物との対話をきちんとしたいということも上げられました。作物との対話というのは、各作物の生育期間と養分吸収量の度合い（「飯の食い方」）を考えて施肥をするべきということです。ホウレンソウのような刈り取る時まで養分を吸収し続け、最後まで活性を持たせなければならない作物を「交通事故死型作物」、稲のように生育後半で窒素分を抑えなければならない作物を

「枕善一膳型作物」というように、ユニークな分類をして説明して下さいました。また、有機栽培米が必ずしも食味が良くないのも、有機質肥料の多投入によるタンパク含有量の高さに原因があるとして、「土作りをきちんとやって、しかも投入量を自身で控えている農家が収量を落とさず、きちんと食味を上げている。それが本当の有機農産物だ。」と分析結果を基にしながら話されました。

最後に、「発想の転換で新たなチャレンジ」をし、「環境と調和のとれた農業をしなければならない」ということを述べられました。硝酸態窒素や地下水汚染で象徴されるように、自然が私たち人間に逆襲してきたなかで、多投入型農業から、環境負荷を減らす低投入型農業に転換し、北海道農業としても、遠隔地という条件など今まで短所としてみられていたところを発想の転換（新たな技術の導入）によって長所とすべきであるとしました。さらにもう一つの発想の転換として、「モノを売る時代から、情報を売る時代がきた」ということをから、消費者へまごころと共にメッセージを送り、口に入るまで責任を持つということが生産者の課題であるされました。さらに、そのような生産者と消費者の対話をスタートラインとして、「どうすれば私たちの豊かな生活を再構築でき、それによって豊かな農業が成り立つかを話し合っていきたい。」として、基調講演を終えられました。



相馬場長はユーモアたっぷりに講演して下さったので、参加者の皆さんも大変興味深く聞き入っていました。アイガモ農法については講演のなかで「合鴨は自然環境と生産者、そして消費者を結ぶ連携の象徴的な意味がある」と述べられ、このフォーラムのテーマと相馬場長の描くこれからの農業の期待する姿が一致していることを示していました。

その後、フォーラムのテーマや基調講演を受けて、パネルディスカッションが行われました。司会は基調講演に続き相馬場長にお願いしました。

パネリストは、アイガモ農法実践者代表として、当会世話人の浅野晃彦さん、都市生活者（消費者）として坂下浩寿さん、農業技術指導の立場から改良普及員の高橋義雄さん、保健婦及び消費者の立場から谷口東美さん、教育者として剣淵高校教諭の船瀬敏朗さんの5人をお願いし、それぞれの立場からご発言して頂き、それを基にして会場から意見を求める形で進みました。



まず初めに、剣淵高校の農業実習でアイガモ農法をしておられる船瀬さんのスライド上映から始まりました。剣淵高校には27aの水田があり、そこに30羽の合鴨を放したそうです。水田を2つに分けて、合鴨を放すのと放さないのではどれくらい雑草の生え方が違うかを観察することで、合鴨の除草効果を観たり、小学生が参加している「ひまわり教室」も映し出され、合鴨を

かわいがっている小学生たちの楽しそうな様子が映し出されました。屠殺・調理を試してみた結果については、羽を抜く時に、お湯に洗剤を混ぜると簡単に抜けたそうです。また、解体するときに失敗した肉片で唐揚げを作り、これが案外好評であったことなどを話されました。このように、アイガモ農法によって、小学生にも水田を開放したりするなど、地域住民とのふれ合いを持つことができ、さらに人間が食べるために命を頂いているということを生徒に教えるのに貴重な体験となったということです。



坂下さんは旭川市民農業大学に入学し、浅野さんの圃場で家族みんなで農作業を種蒔きから秋の収穫、合鴨の解体まで体験することで、子どもの食べ物に対する考え方が変わり、「食べ物と命という心の教育ができた」という話をして下さいました。



谷口さんは保健婦の立場から、日々の検診を通して、子どもが危ないと感じると述べられました。アトピーの子どもが増え、

肌のきれいな非常に少なくなっているそうです。大人も病気ではないのだけれど、体がだるいというような人がおおくまっているということでした。このような状況がどうして起こるのだろうかという疑問から、公衆衛生に関わる者として、旭川市民農業大学で勉強したり、独学で勉強をして、「命と食が直結している」ことを真剣に考えるようになったということです。谷口さんが「人と良（人を良くする）で食という字ができています」ということを教えてくれた時にはすごく納得ができました。



浅野さんは合鴨農法に出会うまでは、せっかく有機農業をやって、みんなに喜んでもらえる農産物を作っている、作っている本人の健康や精神が辛くなる状態にジレンマを感じていたが、4年前にアイガモ農法と出会って、そのような状況が改善され、「合鴨が水田にいて、それをあぜ道で座って見ている情景」が、「有機農業をしていることが非常に分かりやすく、都市生活者と私たち生産者を結ぶ良い方法である」と実践者としての実感を得られました。また、北海道合鴨水稲会が北海道という地域に合った技術の特殊性を考えるために、仲間を作って、情報交換をし、案を出し合う場所として始まったことを会場の皆さんに紹介しました。

高橋さんは、「アイガモ農法をしている

水田は、単なる生産の場ではなく、憩いの場となっている」とし、「農業を都市に表現していくための一つ的手段として大変良いと感じる」と長く改良普及員としてアイガモ農法に関わってきた感想を述べられました。

会場の皆さんからも多くの意見が出されました。いくつか上げると、会場の実践者の方々からは、キツネやカラス等の外敵から合鴨を守る方法についての話が出たり、カメムシの防除法については、今橋さんや佐竹さんから大変参考となる意見が出されました。また、アイガモ農法をしていない農家（奥さん）からも「このフォーラムに参加しただけで（アイガモ農法の）楽しさが伝わってくる」といううれしい感想が出ました。消費者の方からは「今橋さんのところで子ども達に農業に接する機会を作れたのは良かった」と自身の体験をもとに語ってくれました。

相馬場長の進行のうまさもあったと思いますが、パネルディスカッションでの参加者の活発な意見交換がこのフォーラムの成功を実感させてくれました。フォーラム全体としても、協道にそれることなく、話の方向が見えやすく、まとまりのある会になりました。



生産者と消費者が対話を持ち、連携していくことの重要性は基調講演やディスカッションで示されたとおり、これからの食・農業を考える上で重要になってくるはずで

す。北海道合鴨水稲会としてもこのような会をこれからも開いていくことは、大変意味のあることでしょう。また、近々全国大会を北海道地区で開催するという話も出ているなかで、水稲会自体の理念を再確認するためにも、フォーラム運営の仕方について考えていくためにも良い機会になったと感じます。



フォーラムに引き続き、第4会総会が行われました。今年度の事業計画についての主な議題は

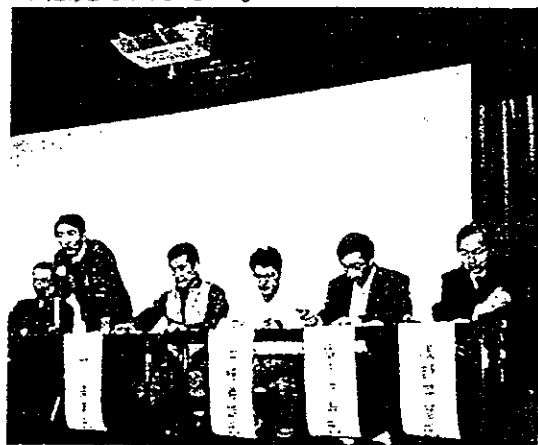
- (1) 全国大会への派遣参加
- (2) 全国大会の北海道開催の検討
- (3) 放飼終了後の合鴨処理についての3点でした。

1点目について、全国大会の派遣を昨年までは3人派遣していたのを今年は1人にすることになりました。理由としては、全国大会が近々あることを見越して、派遣費を少し貯めて、直前の大会に大勢派遣しようということになったからです。派遣者は、今年度から会員となられる当麻グリーンライフ研究会の方1名に決定しました。

2点目の経緯を確認すると、まずは全国

合鴨水稲会から浅野さんに北海道で岡山大の次の大会を北海道でやって欲しいという打診があったところから始まりました。それを世話人会で議論した結果①すぐにはできないであろうが、数年内には必ずやることになるであろう②総会等で会員の意志統一を行い、開催できる体制にしていこうという結論になりました。また昨年の見学会でも懇親会で話題になったり、世話人・事務局も他の会員の方々に伝えてきたことだと思います。

今回の総会で、具体的な話はまだできませんでしたが、近々全国大会を北海道で開催することは皆さんで確認がとれました。また、北海道有機農業研究協議会や上川農業試験場、滝川畜産試験場などの関係諸機関にも協力してもらえようという意見も出ました。



3点目については、新沢舎食鳥処理場を当会の指定処理場とすることが承認され、処理をしてもらうことを考えている人たちは事前に沢崎さんと価格・羽数を相談することが確認されました。なお、処理能力は1700羽～1800羽が限界ということです。

第8回全国合鴨フォーラム岡山大会報告

当麻グリーンライフ研究会 鈴木 陽一

「第11回全国合鴨フォーラム岡山大会」が2月6、7日と500名近い参加者の中盛会に開催されました。

私は、合鴨農法を昨年から取入れ色々なことを合鴨から学びましたが、この岡山大会に参加して全国的に広がりを見せていることを知りました。農業の近代化・省力化は、化石エネルギーすなわち石油製品の限らない投入によって成り立っています。一つの原因に対して一つの方法で対処しています。例えば雑草に対しては除草剤、害虫や病気には農薬、養分供給には化学肥料というバラバラの対処の組み合わせが近代農業であり、一方合鴨はすべてのことを一羽で行い、最後には我々に鴨肉をのこしてくれる、まさに農業になくはならない動物なのです。

全国合鴨水稲会世話人の古野隆雄さんはこうとなえる。

合鴨の稲作への効果として除草と害虫駆除に限定せず、(田)除草、(月)害虫駆除、(火)肥料(米麦)、(水)中耕濁水、(木)稲への刺激以上の5つの総合効果として体系を立て、さらには水田界が合鴨に与える効果として(田)未利用資源の飼料化、(月)豊富な水、(火)生活の場、(水)稲の葉陰による隠れ場として体系化したこれらの総合的効果を「一鳥万宝」の世界と命名している。

合鴨を取り入れてみると、なるほど古野さんのとなえていることが、まったくその通りなことに感銘いたしました。

又、岡山の興陽高校の農業科の生徒が、平成5年から合鴨農法を学習に取入れ、生徒達は合鴨のふれあいを通して興味や関心が高まり、合鴨農法の楽しさ・すばらしさを学んでいると生徒達からの発表がありました。

今、「近代農業だ、省力化」と叫ぶ中もう一度我々農民は、この自然な環境を守り、合鴨農法により一層の必要性を深めさせて戴きました。

本当に合鴨君ありがとう。

合鴨との出逢いにより、この大会で全国の色々な人達と知り合い勉強させていただきました。

語り明かそう
合鴨の夢を!

第8回全国合鴨フォーラム
岡山大会

日時 1998年2月6日(金)・7日(土)
会場 岡山プラザホテル(岡山県岡山市)

主催 全国合鴨水稲会連合会・全国合鴨水稲会
協賛 岡山県農業試験場・岡山県水産試験場
お問い合わせ先 全国合鴨水稲会連合会 TEL/FAX 045-251-8212

事務局より

指定処理場について

第4回北海道合鴨水稻会総会で話し合いました指定処理場の件ですが、下記の処理場を当会の指定処理場としますので、利用希望の方は早めに連絡を取ってください。

なお、総会では、水田から引き上げた時に合鴨を引き取ることも可能とのことでした。

新沢舎食鳥処理場 沢崎龍也

石狩郡新篠津村拓新

TEL:0126-57-2426

FAX:0126-58-3461

薩摩鴨の試験的利用について

平素より、北海道立滝川畜産試験場をご支援いただき心からお礼申し上げます。

さて、試験場で余裕の出た時に、昨年水稻会のご支援で導入してきた「薩摩鴨」の試験的利用を希望される下記まで、ご一報ください。なお、大量の希望はご遠慮くださるようお願い申し上げます。

北海道立滝川畜産試験場研究部家きん科

〒073-0026 北海道滝川市東滝川735
番地1

TEL:0125-28-2211

FAX:0125-28-2165

E-mail

[oharamt@agri.pref.hokkaido.jp]

大原睦生

98年見学会について

今年度は、7月上旬に道北ブロックで開催する予定です。後日、見学案内を発送致しますので、奮って参加して下さい。

北海道合鴨水稻会入会案内

当会の主な活動は、総会及び研修会、圃場見学会、『水かき通信』の発行、全国合鴨フォーラムへの会員派遣等です。入会されますと、行事の案内状、『水かき通信』が届きます。入会は、年会費6,000円を納入すればできます。

会費納入のお願い

98年度の会費6,000円を、5月末までに以下の郵便振替口座に振り込んでください。同封した郵便振替払込書を使われますと、手数料はかかりません。

口座番号：02700-3-38241

加入者名：北海道合鴨水稻会

払込払出局：札幌北七条郵便局

編集後記

別れの季節が過ぎ、新たな出会いの季節である春を迎えました。今年も、合鴨水稻会を通して、どれだけの素晴らしき運命の出会いができるのかが楽しみです。年々、顔が合鴨に似てきたと言われるのですが喜んでいいのかなあ。似てきた人いませんか？ (大窪)

かわいくて、頼りがいのある合鴨のような大窪君が新戦力として加わりました。今年度は修論のため忙しくなりますが、事務局としても全国大会開催にむけて少しでもお手伝いできたらと考えています。(宮入)

北海道合鴨水稻会 水かき通信 第5号

1998年1月23日発行

発行：北海道合鴨水稻会

発行所：北海道合鴨水稻会事務局

〒060 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学農学部

農業経済学科農業市場学講座

宮入 隆・大窪宗磨

tel:011-706-4941

fax:011-736-8633